

昭和44年度日本体育協会スポーツ
科学研究報告 No. XII

TSPI の 検 討

財団法人 日本体育協会
スポーツ科学委員会

昭和44年度、日本体育協会スポーツ科学研究報告

No. XII・TSPIの検討

松田岩男・藤田厚・近藤充夫

1. 研究のねらい

東京オリンピックを前にして、運動選手の性格特性を理解するために必要な性格テストの作成を試み、心理部会では昭和39年TSPIを作成した。その後、今日までTSPIはオリンピック候補選手をはじめ、各種スポーツ選手の性格の診断や選手の相談、コーチングの手がかりに利用されてきた。

TSPIの作成にあたって、MMPI 原版やTPI(東大版)、矢田部ギルフォード性格検査などの資料を参考にして、運動選手の特徴があらわれるように配慮されているが、妥当性に関して、いくつかの尺度は問題を残していることを報告している¹⁾。

本研究は、TSPIの改訂の必要性を検討するために、予備的調査として、TSPIの各尺度と矢田部ギルフォード性格検査の各尺度との関連を吟味しようとするものである。

2. 研究の方法

(1) 対象。冬期オリンピック候補選手(スキー、ルージュ、ボブスレー)および、学連ライフル選手 男子149名。

(2) テストの実施。TSPIと矢田部ギルフォード性格検査(Y-G検査)を同じ日に実施した。

(3) TSPIとY-G検査との関連の検討。TSPI標準点5,4、とY-Gの標準点1,2および5,4との関連をみるために、TSPIの各尺度毎に標準点5,4であった被験者のY-G各尺度の標準点について調べた。

TSPIは標準5,4の場合、その傾向が顕著なものとして診断するようになっているが、Y-Gは、

尺度によっては、1,2も傾向が顕著であると診断されるようになっている。即ち、TSPIは5,4を問題として診断されるが、Y-Gは1,2と5,4の両極を問題として診断されるのである。そのため、Y-Gについては、1,2,5,4をとりあげて検討した。

また、TSPIの各尺度は妥当性尺度と臨床尺度とに分かれ、臨床尺度は、質問項目がいくつかの尺度にダブらせてあるので、尺度によって質問項目数が異なっている²⁾これに対し、Y-Gは各尺度とも質問項目数は10で、各尺度毎に独立している。³⁾更には、TSPIは情緒の安定性に関する尺度が多く、尺度名は臨床的な症候群の名称をとりあげているのに対し、Y-Gは、情緒の安定性、適応のしかた、向性に関する要因を尺度名にしているので、TSPIの尺度と対応する尺度と、直接対応しないものとある。これらについても検討するときに配慮した。

3. 整理のしかた

TSPIの各尺度毎に標準点5の者および5と4の被験者を抽出し、TSPI5とY-G5、TSPI5とY-G5,4、TSPI5,4とY-G5,4、TSPI5とY-G1、TSPI5とY-G1,2、TSPI5,4とY-G1,2の出現率を求めた。

4. 結果

(1) TSPI標準点5、および5,4のもの出現率は表Iに示した。TSPIの標準化はパーセントイル法により、20%タイル毎に区切って5段階の標準点を作成したものである。今回の被験者149名についてみると、Pa(考え方尺度)、Ma(活

¹⁾ 昭和40年3月、東京オリンピックスポーツ科学報告心理部会報告

²⁾ TSPIの質問項目数は全120項目、尺度別ではL(8) Hs(17) D(26) Hy(29) Pt(31) Pd(18) Ma(28) Pa(19) Sc(24) Si(21) Do(10)である。

³⁾ Y-Gは全120項目

発尺度)を除いて標準点5の出現率は小さく、標準点4では、L(見せかけ尺度) Pa, Si(うちとけない尺度) Do(引っ込み思案尺度)の出現率が小さかった。標準点5,4の合計では、特に出現率が小さいのはL, Se(情意尺度), Doであり、逆にMaは65.1%と出現率は大きかった。Ma尺度は、一般にスポーツマンの場合には高く出るものであり、今回の被験者の場合は、その特徴があらわれている⁴⁾。

(2) TSPI 各尺度と Y-G 各尺度との関連の検討

① TSPI 標準点5と Y-G 標準点1および5との関連について。

表IIおよび表IIIはTSPI標準点5の被験者でY-G標準点が1(表III) Y-G標準点が5(表III)であったものの出現率を示したものである。Y-G標準点の1および5は標準化がSD法によっているので、出現率はいずれも6.7%である。これらの表から関連が比較的であるとみられるもの(40%以上)をあげてみるとTSPIのLとY-GのD

(抑うつ小) C(気分の変化小) I(劣等感小), TSPIのPa(考え方尺度)とY-GのD(抑うつ小), TSPIのSe(情意尺度)とY-GのCo(協調的), TSPIのHs(とらわれ尺度)とY-GのO(主観的), TSPIのPd(特異性尺度)とY-G

表I TSPI 各尺度別5,4得点出現率(%) n=149

標準点 尺度	5	4	5,4
?	23 (15.4)	12 (8.1)	35 (23.5)
L	12 (8.1)	11 (7.4)	23 (15.4)
Hs	20 (13.4)	28 (18.8)	48 (32.2)
D	14 (9.3)	29 (19.5)	43 (28.9)
Hy	24 (16.1)	24 (16.1)	48 (32.2)
Pd	11 (7.4)	34 (22.8)	45 (30.2)
Pa	36 (24.2)	19 (12.8)	55 (36.9)
Pt	15 (10.1)	29 (19.5)	44 (29.5)
Se	9 (6.0)	27 (18.1)	36 (24.2)
Ma	50 (33.6)	47 (31.5)	97 (65.1)
Si	18 (12.1)	20 (13.4)	38 (25.5)
Do	11 (7.4)	16 (10.7)	27 (18.1)

表II TSPI 得点5の被験者のY-G 検査得点1への出現率

YG.1		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.5	n												
?	23	2 8.7	2 8.7	2 8.7	2 8.7	1 4.3	2 8.7						
L	12	5 41.7	6 50.0	5 41.7	1 8.3	3 25.0	2 16.7	2 16.7					
Hs	20						1 5.0	1 5.0		1 5.0			
D	14									1 7.1	1 7.1	1 7.1	1 7.1
Hy	24						1 4.2	2 8.3		1 4.2		1 4.2	
Pd	11											1 9.1	
Pa	36	17 47.2	10 27.8	12 33.3	7 19.4	7 19.4	8 22.2	6 16.7		1 2.8			
Pt	15									1 6.7		1 6.7	1 6.7
Se	9	2 22.2	2 22.2	2 22.2	1 11.1	1 11.1	4 44.4	3 33.3					
Ma	50	13 26.0	8 16.0	12 24.0	9 18.0	6 12.0	4 8.0	5 10.0		1 2.0	1 2.0		
Si	18					1 5.6	2 11.1	1 5.6				1 5.6	1 5.6
Do	11	1 9.1	1 9.1									1 9.1	

上段 n 下段 %

⁴⁾ TSPI の尺度名は次の通りである。

L(見せかけ尺度) Hs(とらわれ尺度) D(気が重い尺度) HY(むら尺度) Pd(特異性尺度) Pa(考え方尺度) Pt(不安感尺度) Se(情意尺度) Ma(活発尺度) Si(うちとけない尺度) Do(引っ込み思案尺度)

表III TSPI 得点5の被験者のY-G 検査得点5への出現率

YG.5		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.5	n												
?	23		1 4.3		1 4.3		1 4.3	1 4.3	1 4.3	2 8.7	1 4.3		1 4.3
L	12					1 8.3		1 8.3	1 8.3	1 8.3	1 8.3	4 33.3	3 25.0
Hs	20	3 15.0	2 10.0	2 10.0	3 15.0	8 40.0	6 30.0	6 30.0		2 10.0			
D	14	3 21.4	1 7.1	2 14.3	3 21.4	5 35.7	5 35.7	1 7.1					
Hy	24	3 12.5	2 8.3	2 8.3	3 12.5	9 37.5	7 29.2	6 25.0	1 4.1	4 16.7			
Pd	11	2 18.2	2 18.2	3 27.3	3 27.3	5 45.5	5 45.5	3 27.3		2 18.2			
Pa	36					1 2.8		3 8.3	5 13.9	6 16.7	5 13.9	6 16.7	11 30.6
Pt	15	2 13.3	2 13.3	3 20.0	3 20.0	7 46.7	7 46.7	2 13.3		2 13.3	1 6.7		
Sc	9	2 22.2	1 11.1	1 11.1	2 22.2	2 22.2	2 22.2			1 11.1		1 11.1	1 11.1
Ma	50					3 6.0	1 2.0	14 28.0	9 18.0	15 30.0	9 18.0	10 20.0	12 24.0
Si	18	3 16.7	2 11.1	3 16.7	3 16.7	6 33.3	5 27.8	1 5.6		2 11.1			
Do	11	2 18.2	1 9.1	2 18.2	2 18.2	3 27.3	2 18.2	3 27.3		1 9.1			

上段 n 下段 %

表IV TSPI 得点5.4の被験者のY-G 検査得点1への出現率

YG.1		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.5.4	n												
?	35	5 14.3	4 11.4	4 11.4	2 5.7	1 2.9	3 8.6	1 2.9					1 2.9
L	23	7 30.4	7 30.4	5 21.7	1 4.3	4 17.4	5 21.7	3 13.0					1 4.3
Hs	48	1 2.1	2 4.2	4 8.3			3 6.3	3 6.3		2 4.2	1 2.1	2 4.2	1 2.1
D	43	2 4.7		2 4.7		1 2.3	4 9.3	4 9.3		1 2.3		2 4.7	1 2.3
Hy	48	2 4.2	1 2.1	4 8.3			2 4.2	3 6.3		1 2.1		2 4.2	1 2.1
Pd	45	1 2.2	3 6.7	2 4.4			2 4.4	4 8.9		1 2.2		1 2.2	1 2.2
Pa	55	19 34.5	14 25.5	15 27.3	8 14.5	8 14.5	10 18.2	7 12.7		3 5.5			
Pt	44	2 4.5		1 2.3			1 2.3	1 2.3		1 2.3		2 4.5	1 2.3
Sc	36	5 13.9	3 8.3	4 11.1	2 5.6	3 8.3	5 13.9	6 16.7		1 2.8		1 2.8	1 2.8
Ma	97	24 24.7	15 15.5	20 20.6	10 10.3	7 7.2	12 12.4	9 9.3		3 3.1	2 2.1	1 1.0	
Si	38	2 5.3	2 5.3	2 5.3		1 2.6	4 10.5	2 5.3		2 5.3		1 2.6	1 2.6
Do	27	1 3.7		1 3.7		1 3.7	1 3.7					1 3.7	1 3.7

上段 n 下段 %

の O (主観的), Co (非協調的), TSPI の Pt (不安感尺度) と Y-G の O (主観的), Co (非協調的) である。

(2) TSPI 標準点 5, 4 と Y-G 標準点 1, 5 と

の関連について。

表IV, 表Vは, TSPI 標準得が5または4の被験者で, Y-G が1 (表IV), Y-G が5 (表V) であるものの出現率を示したものである。ここで

表V TSPI 得点5.4被験者のY-G 検査得点5への出現率

TSPI. 5.4 \ YG. 5	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
? n 35		2 5.7		1 2.9		1 2.9	3 8.5	2 5.7	5 14.3	1 2.9	3 8.5	3 8.5
L 23					2 8.7	1 4.3	3 13.0	1 4.3	3 13.0	1 4.3	4 17.4	4 17.4
Hs 48	3 6.3	2 4.2	3 6.3	4 8.3	10 20.8	9 18.8	10 20.8		6 12.5	1 2.1	2 4.2	4 8.3
D 43	3 7.1	2 4.8	3 7.1	6 14.3	8 19.0	7 16.7	5 11.9	1 2.4	3 7.1		1 2.4	1 2.4
Hy 48	3 6.3	2 4.2	3 6.3	4 8.3	10 20.8	9 18.8	11 22.9	1 2.1	7 14.6	1 2.1	2 4.2	4 8.3
Pd 45	3 6.7	2 4.4	3 6.7	5 11.1	5 11.1	8 17.8	6 13.3	3 6.7	9 20.0	1 2.2	1 2.2	2 4.4
Pa 55					2 3.6		6 10.9	8 14.5	10 18.2	7 12.7	8 14.5	14 25.5
Pt 44	3 6.8	4 9.1	3 6.8	6 13.6	10 22.7	9 20.5	7 15.9		7 15.9	1 2.3	1 2.3	1 2.3
Se 36	3 8.3	2 5.6	3 8.3	5 13.9	6 16.7	9 25.0	3 8.3	2 5.6	3 8.3	1 2.8	2 5.6	3 8.3
Ma 97				1 1.0	6 6.2	3 3.1	21 21.6	10 10.3	21 21.6	10 10.3	13 13.4	20 20.6
Si 38	3 7.9	2 5.3	3 7.9	3 7.9	6 15.8	7 18.4	3 7.9		3 7.9	1 2.6		
Do 27	3 11.1	2 7.4	3 11.1	4 14.8	4 14.8	4 14.8	3 11.1		1 3.7	1 3.7		

上段 n 下段 %

は、Y-G では各尺度の傾向が顕著である標準点1, 5のもの出現率は、低く、出現率でとりあげられるものはない。

(3) TSPI 標準点5とY-G 標準点1, 2および5, 4の関連。

表VI, VIIは、TSPI 標準点が5で、Y-G 標準点が1, 2 (表VI), 5, 4 (表VII)であったものの出現率を示したものである。Y-G の標準点の2および4は、標準化では24.2%が入っているから、1, 2および5, 4は、それぞれ理論的には30.9%が入ることになっている。TSPI の5は20%前後であるから関連が比較的あると考えられる。

関連が顕著であると思われる出現率50%以上についてみると、TSPI のL (みせかけ尺度) は、Y-GのD (抑うつ小) C (気分の変化小) I (劣等感小) N (神経質でない) Co (協調的) Ag (攻撃的でない) G (活動性大) T (思考的外向) S (社会的外向)に高い出現率を示している。特にC, I, G, Tは75%以上を示している。

TSPI のHsはY-GのN (神経質である) O (主観的)で高い出現率を示している。TSPI のDはY-GのD (抑うつ大), N (神経質大), O (主観的), Co (非協調的)で高い出現率を示し

ている。TSPI のDは、Y-GのC (気分の変化大)でも57%であるが逆のC (気分の変化小)でも21%の出現率がみられる。

TSPI のHyは、Y-GのN (神経質大), O (主観的)で高い出現率を示している。TSPI のHyで50%を越すのは、他にG (活動的), R (のんき大)があるが、いずれも逆の非活動的, のんきでないとも17%~20%の出現率がみられる。TSPI のPaはY-Gの多くの尺度に高い出現率がみられ、Y-GのD (抑うつ大) C (気分の変化大) N (神経質大) O (主観的) Co (非協調的) Ag (攻専的)はいずれも63%~80%の出現率であった。

TSPI のPaはY-GのD (抑うつ小) C (気分の変化小) I (劣等感小) N (神経質でない) O (客観的) Co (協調的) G (活動的) A (支配性大) S (社会的外向)に高い出現率がみられた。TSPI のPtはY-GのO (主観的) Co (非協調的)に高い出現率を示した。TSPI のSeは一定の出現の傾向がみられれない。TSPI のMaのY-GのD (抑うつ小) I (劣等感小) N (神経質でない) G (活動的) T (思考的外向) A (支配性大) S (社会的外向)に高い出現率を示して

いる。TSPIのSiはY-GのA(支配性大)S(社会的外向)に高い出現率を示している。TSPIのDoはY-GのC(気分の変化大)Co(非協動的)に高い出現率を示している。

(4) TSPI標準点5,4とY-G標準点1,2および5,4との関連。

表Ⅷ,表ⅨはTSPI標準点が5,4であった被験者で,Y-G標準点が1,2(表Ⅷ)5,4(表

表Ⅵ TSPI 得点5の被験者のY-G 検査得点1.2への出現率

YG.1.2		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.5	n												
?	23	9 39.1	5 21.7	12 52.2	10 43.5	9 39.1	5 21.7	8 34.8	5 21.7	4 17.4	1 4.3	1 4.3	2 8.7
L	12	7 58.3	9 75.0	9 75.0	7 58.3	6 50.0	7 58.3	7 58.3		3 25.0	1 8.3		
Hs	20	1 5.0	3 15.0	6 30.0	1 5.0	4 5.0	5 20.0	6 30.0	3 15.0	5 25.0	4 20.0	7 35.0	3 15.0
D	14		3 21.4	3 21.4	1 7.1		1 7.1	5 35.7	5 35.7	3 21.4	3 21.4	7 50.0	4 28.6
Hy	24	2 8.3	6 25.0	8 33.3	2 8.3	2 8.3	4 16.7	6 25.0	4 16.7	5 20.8	9 37.5	9 37.5	3 12.5
Pd	11		1 9.1	1 9.1			1 9.1		3 27.3	1 9.1	5 45.5	5 45.5	4 36.4
Pa	36	23 63.9	25 69.4	30 83.3	28 77.8	21 58.3	21 58.3	11 30.6	4 11.1	9 25.0	3 8.3	2 5.6	1 2.8
Pt	15	2 13.3	5 33.3	2 13.3	1 6.7	1 6.7	1 6.7	4 26.7	4 26.7	2 13.3	3 20.0	10 66.7	6 40.0
Sc	9	3 33.3	3 33.3	6 66.7	3 33.3	3 33.7	6 66.7	3 33.3		4 44.4	2 22.2	3 33.3	3 33.3
Ma	50	32 64.0	25 50.0	40 80.0	35 70.0	18 36.0	22 44.0	10 20.0	3 6.0	6 12.0	7 14.0	1 2.0	2 4.0
Si	18	6 33.3	4 22.2	4 22.2	5 27.8	4 22.2	4 22.2	6 33.3	6 33.3	4 22.2	2 11.1	11 61.1	10 55.6
Do	11	3 27.3	1 9.1	1 9.1		1 9.1	1 9.1	4 36.4	1 9.1	3 27.3	5 45.5	5 45.5	3 27.3

上段 n 下段 %

表Ⅶ TSPI 得点5の被験者のY-G 検査得点5.4への出現率

YG.5.4		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.5	n												
?	23	6 26.1	6 26.1	1 4.3	4 17.4	5 21.7	5 21.7	5 21.7	8 34.8	10 43.5	7 30.4	8 34.8	11 47.8
L	12	1 8.3	2 16.7		2 16.7	3 25.0		4 33.3	9 75.0	4 33.3	9 75.0	6 50.0	7 58.3
Hs	20	9 45.0	9 45.0	4 20.0	12 60.0	14 70.0	10 50.0	8 40.0	10 50.0	9 45.0	2 10.0	4 20.0	6 30.0
D	14	7 50.0	8 57.1	5 35.7	9 64.3	10 71.4	9 64.3	4 28.6	4 28.6	5 35.7	2 14.3	2 14.3	1 7.1
Hy	24	11 45.8	12 50.0	5 20.8	15 62.5	17 70.8	14 58.3	11 45.8	14 58.3	13 54.2	2 8.3	6 25.0	7 29.2
Pd	11	8 72.7	8 72.7	5 45.5	9 81.8	8 72.7	7 63.6	7 63.6	4 36.4	6 54.5		3 27.3	3 27.3
Pa	36	2 5.6	3 8.3		3 8.3	4 11.1	1 2.8	11 30.6	25 69.4	11 30.6	20 55.6	22 61.1	29 80.6
Pt	15	7 46.7	8 53.3	5 33.3	11 73.3	10 66.7	11 73.3	5 33.3	5 33.3	6 40.0	4 26.7	1 6.7	2 13.3
Sc	9	2 22.2	2 22.2	3 33.3	5 55.6	3 33.3	2 22.2		5 55.6	2 22.2	3 33.3	3 33.3	3 33.3
Ma	50	4 8.0	5 10.0		5 10.0	10 20.0	6 12.0	26 52.0	39 78.0	27 54.0	30 60.0	33 66.0	37 74.0
Si	18	7 38.9	9 50.0	8 44.4	10 55.6	9 50.0	12 55.6	4 22.2	7 38.9	5 27.8	9 50.0		1 5.6
Do	11	4 36.4	7 63.6	6 54.5	6 54.5	6 54.5	7 63.6	6 54.5	5 45.5	7 63.6	3 27.3		3 27.3

上段 n 下段 %

IX) であったものの出現率を示したものである。

TSPI 標準点 5, 4 は理論的には 40%, Y-G の 1, 2 および 5, 4 はそれぞれ 30.9% である。TSPI の各尺度毎にみていくと, TSPI の L は, Y-G

の I (劣等感小) G (活動的) T (思考的外向) に高い出現率がみられ, TSPI の Pa は Y-G の D (抑うつ小) I (劣等感小) N (神経質でない) G (活動的) S (社会的外向) に高い出現率がみ

表VIII TSPI 得点5.4の被験者の Y-G の検査得点1.2への出現率

YG.1.2		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.54	n												
?	35	16 45.7	10 28.6	20 57.1	16 45.7	11 31.4	9 25.7	11 31.4	7 20.0	6 17.1	2 5.7	2 5.7	3 8.6
L	23	13 56.5	10 43.5	16 69.6	11 47.8	9 39.1	10 43.5	11 47.8	2 8.7	6 26.1	3 13.0	1 4.3	3 13.0
Hs	48	10 20.8	15 31.3	21 43.8	8 16.7	6 12.5	10 20.8	17 35.4	9 18.8	9 18.8	13 27.1	13 27.1	7 14.6
D	43	10 23.3	10 23.3	14 32.6	7 16.3	6 14.0	13 30.2	12 27.9	13 30.2	6 14.0	10 23.3	13 30.2	7 16.3
Hy	48	8 16.7	13 27.1	18 37.5	7 14.6	5 10.4	12 25.0	13 27.1	9 18.8	7 14.6	14 29.2	15 31.3	7 14.6
Pd	45	16 35.6	12 26.7	18 40.0	16 35.6	7 15.6	11 24.5	12 26.7	7 15.6	9 20.0	10 22.2	10 22.2	9 20.0
Pa	55	32 58.2	31 56.4	40 72.7	37 67.3	27 49.1	27 49.1	18 32.7	4 7.3	13 23.6	5 9.1	5 9.1	1 1.8
Pt	44	8 18.2	8 18.2	10 22.7	5 11.4	2 4.5	5 11.4	9 20.5	8 18.2	4 9.1	9 20.5	13 29.5	7 15.9
Sc	36	13 36.1	11 30.6	15 41.7	9 25.0	11 30.6	15 41.7	14 38.9	8 22.2	8 22.2	6 16.7	10 27.8	7 19.4
Ma	97	56 57.7	44 45.4	69 71.1	54 55.7	33 34.0	41 42.3	24 24.7	8 8.2	17 17.5	15 15.4	6 6.2	6 6.2
Si	38	16 42.1	10 26.3	12 31.6	9 23.7	7 18.4	11 28.9	11 28.9	11 28.9	8 21.1	6 15.8	6 15.8	10 26.3
Do	27	11 40.7	7 25.9	9 33.3	5 18.5	5 18.5	6 22.2	10 37.0	7 25.9	5 18.5	5 18.5	12 44.4	9 33.3

上段 n 下残 %

表IX TSPI 得点5.4の Y-G 検査得点5.4への出現率

YG.5.4		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
TSPI.5.4	n												
?	35	7 20.0	8 22.9	2 5.7	6 17.1	8 22.9	6 17.1	10 28.6	16 45.7	18 51.4	10 28.6	15 42.9	18 51.4
L	23	4 17.4	5 21.7		5 21.7	7 30.4	3 13.0	10 43.5	16 69.6	8 34.8	14 60.9	11 47.8	12 52.2
Hs	48	16 33.3	17 35.4	19 39.6	11 22.9	22 45.8	18 37.5	18 37.5	23 47.9	21 43.8	9 18.8	13 27.1	14 29.2
D	43	13 30.2	17 39.5	11 25.6	22 51.2	19 44.2	16 37.2	15 34.9	17 39.5	20 46.5	13 30.2	9 20.9	8 18.6
Hy	48	17 35.4	20 41.7	10 20.8	21 43.8	24 50.0	19 39.6	22 45.8	23 47.9	25 52.1	9 18.8	11 22.9	14 29.2
Pd	45	15 33.3	17 37.8	11 24.4	21 46.7	16 35.6	18 40.0	22 48.9	23 51.1	20 44.4	16 35.6	15 33.3	17 37.8
Pa	55	2 3.6	4 7.3		3 5.5	7 12.7	5 9.1	19 34.5	35 63.6	18 32.8	29 52.7	32 58.2	40 72.7
Pt	44	17 38.6	23 52.3	11 25.0	29 65.9	24 54.5	20 45.5	22 50.0	25 56.8	22 50.0	12 27.3	8 18.2	10 22.7
Sc	36	8 22.2	11 30.6	9 25.0	16 44.4	11 30.6	15 41.7	9 25.0	14 38.9	10 27.8	11 30.6	7 19.4	11 30.6
Ma	97	12 12.4	13 13.4	3 3.1	17 17.5	23 23.7	15 15.5	48 49.5	63 64.9	53 54.6	49 50.5	54 55.7	62 63.9
Si	38	8 21.1	14 36.8	11 28.9	17 44.7	13 34.2	14 36.8	10 26.3	11 28.9	9 23.7	14 36.8	2 5.3	3 7.9
Do	27	7 25.9	12 44.4	9 33.3	15 55.6	9 33.3	11 40.7	7 25.9	12 44.4	8 29.6	10 37.0		5 18.5

上段 n 下段 %

表X TSPI 各尺度高得点と関連する Y-G 検査尺度

- Y-G 右寄りに出現することが著しい。
- △ Y-G 左寄りに出現することが著しい。
- ◎ 上記○の傾向が顕著である。
- ▲ 上記△の傾向が顕著である。

TSPI. \ YG.	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
?												
L	△	▲	▲			△		◎		◎	○	○
Hs				○	○							
D	○			○	◎	○						
Hy				○	◎							
Pd	◎	◎		◎	◎	○	◎		○			
Pa	△	△	▲	△		△		○			○	○
Pt				◎	○	◎					△	
Sc												
Ma	△		▲	△				◎			○	◎
Si												
Do		○		○		○						

られ、TSPI の Pt は Y-G の N (神経質大) に、TSPI Ma は Y-G の I (劣等感小) G (活動的) A (支配性大) S (社会的外向) に高い出現率を示している。

(5) TSPI の各尺度の傾向が著しいもので、Y-G 検査の両極に出現する傾向が顕著なものについて。

(1)~(4)までを総合して、TSPI の各尺度毎に標準点の高い場合に Y-G 検査の各尺度の左寄り (1, 2) 右寄り (5, 4) の両極に出現する傾向が著しいものをまとめると表 X のようになる。

TSPI の標準点が高くて、Y-G の各尺度の傾向に著しくあらわれないのは、? (疑問点) Sc (情意尺度) Si (うちとけない尺度) であり Y-G の尺度に多く出現するのは L (みせかけ尺度) Pd (特異性尺度) Pa (考え方尺度) Ma (活発尺度) であった。

5. 考 察

Y-G 検査の尺度と関連があると思われる TSPI の尺度について、以上の結果について考察することにする。

Y-G 検査の尺度と関連がみられた TSPI の尺度と、その尺度の標準点が高いときにあらわれると思われる特徴をあげてみると次の通りである⁵⁾。

L (みせかけ尺度)。他人に自分のことを知られることに対する防衛的態度を示している。スポーツの選手でこの尺度の得点の高いものは、コーチに自己の努力精進について報告する場合などに、内容の伴わない自己顕揚の虚言をいう傾向がある。

Hs (とらわれ尺度)。自己の身体や健康に対して劣等感を抱き、しかも、筋肉がひきしまったり、頭がすっきりせず、めまいを起こすことがある。さらに、刺激に敏感で、疲労感が亢進し、知的活動の鈍化を訴える。また、自負心が強く、つねに不確実感があって完全を期そうとして取越し苦労をする。そのため自信欠乏となりやすい。

D (気が重い尺度)。気が重く、ややもすれば

⁵⁾ 東京オリンピックスポーツ科学研究報告別刷心理部会報告「尺度の構成」

抑うつ傾向がある。将来について悲観的に考え、決断力も鈍い。さらに、健康については心氣的で、寝つきがわるく、眠りも浅い。

Hy (むら気尺度)。この尺度の得点の高いものは、顕示的傾向が強く自己の労苦を感情的に、誇張的に示す。しかも、訴えには首尾一貫性がなく、多彩で統一性がない。

Pd (特異性尺度)。この尺度の得点が高いと性格のかたよりがやや著しい傾向を表わしている。この尺度を強いて分類するとつぎの6つの特徴があげられる。(1)自信欠乏、(2)抑うつ、(3)精神的無気力、(4)爆発的、5反社会的、(6)感情の興奮。

Pa (考え方尺度)。一般的な判断の誤りがある。自己の考え方を高く評価、固執する傾向がある。

Pt (不安感尺度)。つねに不安で、観念のとりこになり、雑念がうかんで意識過剰になり、さらに、恐怖が伴うようになると自信を失った状態になる。その反面、何事も几帳面に確かめないと納得できない傾向がある。

Ma (活発尺度)。活力にあふれ、極度に熱中し、過度に努力し、自我感情が高揚し、自信に満ち、自己の才能に誇張的で、反対する人には斗争的になる。

Do (引っ込み思案尺度)。卒先して行動する能力や、人の扱い方や仕事の処理などの統率性に欠けている。

以上のような特徴がみられるといわれているが、特に Hs, D, Hy, Pt に神経質の徴候があらわれるものがある。これらの尺度に関して、Y-G では神経質で、主観的であるものが多くみられることから、Hs, D, Hy, Pt は情緒の不安定をみるものとして確度が高いと考えてよいであろう。

Pd 尺度は、Y-G の D, C, N, O, Ag など情緒の不安定や不適応行動を示すような尺度に多くあらわれているが、先に述べた Pd 尺度の6つの特徴があらわれている。

Ma 尺度はスポーツマンの場合高くでる傾向はあるが、Y-G 検査でも G 尺度(活動性)は一般に高くでる傾向をもっている。Ma が高いことは明るく、躁の傾向をもつから、劣等感も少であり、抑うつや神経質の傾向も少ないといえようし、また、向性も外向的である。

Pa は自己を高く評価するところがあり、劣等感は小である。全般的に情緒の面では安定し、積極的、行動的で、スポーツマンにも多くみられる特徴でもあり、Y-G から考えられる。

TSPI の臨床尺度において、Se (情意尺度)と Si (うちとけない尺度)については Y-G 検査に一定の傾向をみることはできなかったが、Se は本来分裂気質の徴候をみようとする尺度であり、Y-G 検査には、尺度としてこれに対応するものがないことにもよることも考えられる。しかし、向性に関する Si は Y-G 検査の A や S の 1, 2 (服従的、社会的内向)と関連するものであるから、質問項目に問題があるのかもしれない。この点は著しい傾向がみられなかった Do についても云えることであろう。

TSPI の妥当性尺度である L 尺度については Y-G 検査にみられる傾向から云うならば、情緒的安定、協調的、活動的、行動的、外向的ということがあげられるが、L 尺度が問題とする特徴と一致するようには考えられない。

6. まとめと今後の問題

TSPI の各尺度について、Y-G 検査との関連で予備的な検討を加えてみたが、TSPI の尺度のうち Hs, D, Hy, Pa, Pt, Ma の尺度については、Y-G 検査との関連では、それぞれの尺度がとらえようとする特徴は現在の質問項目によってとらえていると考えられる。

また Pa については、結果について診断の際留意すべき必要が、スポーツマンの場合にあるように思われる。

Se, Si, および Do については質問項目について検討する必要がある。

L については、妥当性尺度としての意味と臨床尺度として診断するときの利用のしかた、および、質問項目や項目数などについて検討しなければならないであろう。

今回は予備的調査であったが、他の性格テストや、尺度との対応だけでなく、コードタイプについて、あるいはプロフィールについて、他の性格特性を類型として診断する性格テストなどとも対応させ検討する必要がある。以上